

あなたのスキルは社会に役立つ

エンジニアだからできる社会貢献

東日本大震災の発生直後に発足したHack For Japanや「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーを始めとして、日本各地で技術を活用した社会貢献活動が行われています。本連載では、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアだからできる社会貢献」の取り組みをお届けします。

第137回

CIVIC TECH FORUM2022が残したもの

- 一般社団法人イトナブ石巻 Pen
- 株式会社Box Japan 辰己学(たつみ まなぶ)
- Code for Fukuoka 徳永美紗(とくなが みさ)
- 一般社団法人コード・フォー・カナザワ 福島健一郎(ふくしまけんいちろう)

一般社団法人シビックテックジャパンが主催する「CIVIC TECH FORUM (以下CTF) 2022」が2023年1月21日(土)に仙台、金沢、奈良、福岡、ならびにオンラインの配信で開催されました。今回はCTF2022に関する当日のレポートを、当日拠点オーナーとして携わった4人で記事にまとめていきます。

CIVIC TECH FORUMとは

そもそもCTFとは、2015年から始まったイベントです。テクノロジーの力を使い、社会課題や市民課題さらに自らの課題を自分たちで解決するアクションを「シビックテック」として掲げ、それをテーマとしてフォーラムである公共広場のよう、シビックテックに興味があるさまざまな人に集まっていただき、事例や実践、ノウハウやチャレンジを共有する場としてイベントは進められてきました。これまでのCTFを振り返ったときに、3つのシーズンがあったと運営側は考えています。これはイベントの形式の変更を指すもので、3つのシーズンに分けてイベントを大きく変化させてきました。

第1シーズンは、2015年から2017年を指します。一般的に、シビックテック黎明期とも考えることができますが、日本にもCode for XXによる地域のブリゲードが誕生してきたところです。このころのCTFは、シビックテックに近い

領域と想定される有識者をお招きして、「シビックテック」という言葉がもつ可能性についてお話をさせていただくことにより、テクノロジーと市民活動がどのように混ざり合っていくかの道筋を示唆する場を作ってきました。

その後、日本の各地にシビックテックのコミュニティやプレイヤーが生まれてきたことを受けて、2018年より第2シーズンを迎えることになります。第2シーズンではシビックテックのプレイヤーにスポットを当て、プレイヤー50人によるライトニングトーク形式での発表の場へCTFは変化していきました。シビックテックプレイヤーによるライトニングトークによって、各地のシビックテック活動に関する取り組みやその思いが共有されて、シビックテックに関する仲間を増やす場へ変化をすることができました。2020年に関しては、COVID-19(新型コロナウイルス)というテーマを基に、新型コロナウイルス関連で生まれたシビックテック活動をライトニングトーク形式のオンラインで発表する取り組みも行い、これ以降は感染症の心配もあったためにオンラインで開催することを余儀なくされました。

そして2022年、CTFは第3シーズンを迎えることになります。次にスポットを当てたのは「地域」です。この背景には、日本各地におけるシビックテックプレイヤーの成熟度が関係しています。熟練を積んだシビックテックプレイヤー

が地元の課題に向かい合うことによって、その地域の課題解決に大きく貢献してきている事実があります。一方「シビックテック」という言葉に過度にこだわることにより、テクノロジーによる課題解決に注目が行きがちです。しかし、そもそも地域課題に対する取り組みにおいてはテックであってもノンテックであっても同じではないか、という結論を得ました。そこで本年は「シビックとテック」というテーマを掲げ、地域特有の課題に対し、テック側、ノンテック側がどのように取り組んでいるのか、おのおのの拠点から発表し、それを日本中のシビックテックプレイヤーに共有しました。これにより、もう1つ変化を遂げたCTFを開催することができたと思います。

仙台拠点 テーマ：「防災」

ここからは拠点ごとにどのようなテーマを掲げてプログラムを行ったか振り返っていきます。仙台拠点に関しては、Penが取り扱います。筆者は、一般社団法人イトナブ石巻に所属し、「みんなのトイレマッププロジェクト」に取り組んでいます。筆者は、東京の六本木で行われたCTF2019から毎回参加や登壇などをしており、CTF2021からは運営スタッフとして、広報などの作業にあたっています。今回も引き続きCTFの運営スタッフ兼仙台の拠点オーナーとして携わりました。今回のこの記事の取りまとめもしています。

仙台拠点のテーマとして掲げたのは「防災」です。なぜならここ仙台という土地は、ご存じのように東日本大震災を経験した土地であり、いまだに2011年3月11日の大地震から生じている余震にも遭っており、再び東北の太平洋沖を震源とする大きな地震が来るのではないとも言われています。加えて昨今の温暖化による気象の変化により、新たな自然災害に遭遇する時代にもなりました。筆者たちは来る自然災害にどう向き合うことができるかという観点で、こ

のテーマを扱うことになりました。

仙台拠点は、ファシリテーターをCode for Shiogamaの小泉勝志郎氏にお願いし、2名と1団体の防災に関する取り組みをうかがうことができました。1人目は、東日本大震災以降に情報支援団体「ネトボラ宮城」を立ち上げ、現在は一般社団法人情報支援レスキュー隊（IT DART）で活動している佐藤大氏。佐藤氏には、自然災害が発生直後の行政と、民間の取り組むべきことをまとめていただき、ご自身が参加されているIT DARTがどんな支援を行うことができたかをお聞きしました。

2人目は、プライムバリュー代表の吉田亮之氏。吉田氏は避難所などが開設後に支援物資をオーダーしていくときに、これまでの場合FAXなどといった時間を要する課題があったことを挙げられました。そこで、ご自身の会社で開発されているクラウドサービスを使うことによって、災害が発生した際にクラウド上で自治体と企業をつなげ、必要物資が迅速に届けられるシステムを作ったそうです。

3組目はきずなFプロジェクト。高校生から20代のグループで、中学における震災学習をきっかけに、自らの被災し家族を失った経験から、紙芝居を作り、それを発表することによって後世に震災時の話を語り部として語り継いでいく活動をしているそうです。当日も宮城県石巻市での語り部活動があったにもかかわらず、石巻市からリモートで参加していただきました。

最後に、登壇したみんなでクロストークを行い、互いのプロジェクトの印象に残った点を挙げていきました。個別で見ると、プロジェクトで行っていることは違いがあっても、みな来たるべき震災に向き合おうという、同じ思いを持っていることを確認することができました。

福岡拠点 テーマ：「文化財」

福岡拠点に関しては、福岡県でCode for Fukuokaというシビックテック団体の代表とし



て活動しており、CTFは2019年～2021年に登壇、2020年から運営側として関わっている徳永美紗が紹介します。

まずは福岡拠点のテーマを「文化財」とした理由を2つ紹介します。1つは2020年から文化財関係の方とご縁があり、小学校の文化財に関する学習においてARコンテンツを福岡市の方とエンジニアコミュニティで作り、これがまさに今回のメインテーマである「シビックとテック」だと感じたことです。そしてもう1つはCTF2022の多拠点開催が決まったときから福岡なら会場はエンジニアカフェと決めており、エンジニアカフェとは重要文化財をエンジニアコミュニティの場とした福岡市の施設で、これもまた今回のメインテーマにぴったりと感じ、エンジニアカフェが文化財であることからテーマを決定しました。

福岡のセッションは、福岡市博物館の有馬総館長による福岡市の文化財状況の講演に始まり、ARコンテンツを作った福岡市史跡整備活用課の中尾さん、福岡XR部というエンジニアコミュニティの長峰さん、そして遺跡が大好きで遺跡グッズ制作やイベントを実施しているコダイブレスの中村さんをさらにお迎えして、筆者がモデレータとして「市民が文化財を身近に感じるには」というテーマでトークセッションをしました。ARコンテンツの話やコダイブレスのグッズの話、そして有馬総館長から昔の鳥瞰図ちようかんずにおける示唆など、1時間では話し足りないまま盛況のうちに終わりました。

市民が文化財を身近に感じるうえでテクノロジーにできることはたくさんあるだろうとの結論ではありましたが、今回をきっかけとしてもっと具体的なところは登壇者たちで今後も議論を重ねていきたいと思っています。

金沢拠点 テーマ：「政治」

金沢拠点に関してはオーナーを担当した福島健一郎が担当します。筆者は石川県で一般社団

法人コード・フォー・カナザワ (Code for Kanazawa) というシビックテック団体の代表理事を務めて県内や国内のシビックテック活動と啓蒙を続けながら、CTFは第1回から登壇者や運営スタッフとして関わっています。

金沢拠点のテーマがなぜ「政治」なのか？ それは地域の課題解決において、そもそも選挙によって選ばれる政治家の方たちが、そもそもどのような課題を重視し、それをどう解決すべきか、そしてそこにどれだけの税金を使うかなどを決定している、つまり、「選挙」によって地域の社会は大きく左右されるという事実があるからです。ただ、そうであるのに地方選挙では投票率も低く、政治家に対して無関心な人たちも多いのが事実です。シビックテックを実践することも大事ですが、そもそも選挙や政治に私たちが関心を向けていくことはとても大切ではないかとCode for Kanazawaは感じています。そういった問題提起から、Code for Kanazawaは、昨年行われた石川県知事選挙で初めて「石川選挙ナビ」という候補者政策比較アプリをリリースしました。

当日の金沢会場では、その開発者チームである3人のメンバーとイベント参加者全員でグループディスカッションを行いました。「選挙で自分が望む候補者を選ぶためにはどんな情報があればいいのか？」「そもそもみんなはどう候補者を選んでいるのか？」など活発な議論が行われました。グループディスカッションの議論をまとめると、政治や選挙に対して無関心であることが一番良くなく、少しでもわかりやすく提示できるようなサービスがあることが大事と考えられ、今後もCode for Kanazawaとしては継続的に議論や開発を行っていきたいという話になりました。まずは今年の統一地方選挙においても新しい試みにチャレンジする予定です。

奈良拠点 テーマ：「こども」

奈良会場のオーナーを務めさせていただきま

した辰己学です。奈良県生駒市在住、普段はBox JapanというSaaS企業でソリューションエンジニア職に従事しています。地元生駒市が2015年に立ち上げた市民PRチーム「いこまち宣伝部」の初代部員であり、これがきっかけで2019年にシビックテックフォーラムにLTで初登壇、2021年に運営委員に加わり、CTF2022では奈良会場の企画運営を担当させていただきました。

奈良会場のテーマ「こども」を選んだのは、ひとつは筆者自身がシビックテックに関わるきっかけになったのが娘の誕生だったこと、もうひとつはおとな世代にとっては「もの珍しい」「最先端の」テックも、現代のこども世代にとっては「あって当然」のテックであり、こども目線を体感することが新しいシビックテックのフェーズを考えるひとつの契機になるのでは？と思ったからでした。

奈良会場は5組の発表者——奈良県立図書館情報館・乾聰一郎氏、奈良県CIO・前田真人氏、生駒市広報広聴課・村田充弘氏、奈良県生駒市教育指導課教育改革担当・尾崎えり子氏、生駒小学校現役生2人——が「こども」をテーマに順にスピーチするオムニバス形式を取りました。おとな世代の教育や行政を通じたこどもへの想いを聞いた後、ギガスクール構想により学校で日常的にパソコンを使っている現役小学生のライフとテックの思いの丈を聞かせてもらう、という構成を取りました。参加したみなさんそれぞれの新しいシビックテックのフェーズを考える契機として胸に残り続けていてくれたらと思います。そして、こどもシビックテッカーが当たり前になるくらいにこのテーマが発展してほしいです。

CTF2022が残したものとは

CTFが大切なことにしている点に、ログを残すことがあります。実際当日に発表したことをWeb上やYouTubeに残すことによって、社会課題に取り組んだことを後世に残すことを今まで

意識して取り組んできました。筆者たちは、このイベントを行うことにより、何を残せたのだろうと最後に考えてみます。

今回は、プレイヤーから地域にフォーカスを変えることによって、その地域ごとにある特有の課題に関して深く知ることができました。そうした課題は、地元で活動し問題に取り組んでいる人だからこそ気づくことができ、結果CTFという場でスポットを当てることができます。そもそも今回、どうして多拠点での開催に至ったのかといえば、新型コロナウイルスによる感染症の問題があったために、大人数で集まることが厳しいと想定されたからです。その中で、リアル感を持ってイベントを開催したいと思ったときに、地方に出て多拠点という選択肢が生まれてきました。

つまり今回のイベントでは、社会において大きな社会課題があったとしても、工夫することによってより良いものに変えていけることを後世に残せたのではないかと、筆者たちは考えています。社会課題に取り組むということは、テクノロジーの有無ではないのです。その地域に課題があり、個人個人がそれに対し気持ちを抱いています。さらにそれが共鳴し合うときに、みんなで取り組めることを実感することができました。筆者たちもさまざまな社会課題を乗り越えてきたというログを残しておくことで、後世になり新たな社会課題が生じたときにこれらのログが役に立てばと思っています。

CTFはこれまで「何を成し遂げたか」ではなく「どのような気持ちで取り組みたいか」という気持ちを大切にしてきました。社会には自分が気づかない課題が多々あります。自分で気づくことができないなら、こうした場に参加し、新しい発見ができるかもしれません。それは社会課題やそれに対する気持ちに触れることであり、結果シビックテッカーとしてより良い社会を作ることができるのではないのでしょうか。こうしたおのおのの課題に対して共有し、共鳴し合う場を、これからも提供できればと思っています。SD